

「ひと」×「まち」×「さと」が 織りなす未来都市 三田



三田市役所

神戸大学大学院 システム情報学研究科准教授
なかむら まさひで
中村 匡秀さん

関西学院大学 建築学部
教授
しみず ようこ
清水 陽子さん

もり てつお
三田市長
森 哲男

あかさわ ひろき
兵庫県立大学 自然・環境科学研究科教授
赤澤 宏樹さん

えられる参加者の姿に、三田愛にあふれていると感動しました。今後も、ぜひ続けていきたいです。

清水 三田は今、新しいステップに進む時期と見えています。地域には、いろいろなニーズがあり、多様な主体が活動しています。一方で、活動は広がらないと悩む若者もいます。関西学院大学の卒業生も三田で起業する人が少しずつ増えています。やる気のある人材を育てるには、行政の支援だけでなく、チャレンジする人を受け止めてくれるまちの環境も重要です。三田には、若者を応援する風土が育ちつつあると感じており、地域に大いに期待しています。

中村 防災や観光を担当する市職員と一緒に学生が三田に関するアプリを創りました。学舎での学びも大切ですが、実社会でどのような課題があるのかを発見し、学んだ技術をどのよう役立てていくのか。「学びのまち」である地域を実践の場とすることで、学生はさらなる成長の機会を得られます。

清水 学生を学ばせる対象としてだけではなく、地域に対してできることがあり、地域と関わりながら自らの力を発揮することを経験し、社会人として扱っていただくことで得られる学びも貴重です。

市長 今後の10年間の大きな課題は、人口減少と急激な高齢化です。この数年、若者が活躍できるまちづくりに取り組んできましたが、さらに若者と高齢者との関係づくりも重要と考えています。三田の成長の時代を支えてきたのは、今の高齢者の皆さんの力です。しかし、コミュニティ活動においては、さまざまな課題も出てきています。そこで期待するのは、学生を中心とする志の高い若者たちです。若者のパワーが、高齢者に好影響を与えると同時に、高齢者は人生経験を生かし、若者を応援することで、まちは大きく変わっていくと思います。それを支える仕組みとして、デジタルは重要なツールになります。

「まち」が輝く——
新しい仕組みに順応できる

どのように10年後の「まち」を思い描いているかお聞かせください。

清水 「住み続けることのできるまち」が大きなポイントです。課題のひとつは公共交通で、行きたい場所へ簡単に行けなければ、移動を躊躇する状況になります。それは、活動の範囲を狭め、生活の質を低下させる恐れにつながります。未来を考えると、自動運転も含め、新しい移動手段や技術に順応できるまちづくりが必要で、外出をしたくなる仕掛けがまちにあり、新しい移動手段を駆使することで、人がスムーズに動き、賑わいを生み活躍できるまちになることが大事です。三田にそうなるってほしいです。

中村 自動運転は魅力的な技術で、行きたい場所に自由に行ける未来図が描けます。技術革新はどんどん進んでいます。一方で事故の責任などが、まだまだ議論が必要です。ライドシェア(相乗り)などの仕組みも、運用には法律面などで課題はありますが、地域に雇用を生み出すチャンスにもなると思います。利用者の利

令和4年4月、三田のこれからの10年間のまちづくりの道標となる「第5次三田市総合計画(策定中)」がスタートします。社会が大きく急激に変化する時代にあって、10年後も輝く三田のまちとはどのような姿なのか。

新春座談会では、「ひと」×「まち」×「さと」が織りなす未来都市「三田」をテーマに、三田市総合計画審議会をはじめ、本市のまちづくりの各分野に携わっておられる3人を迎え話を伺いました。

「ひと」が輝く——
人から地域のつながりに

多様な個性は地域においてどのように繋がっていくのでしょうか。

赤澤 個性や多様性が認められる環境で、誰もがいきいきと暮らせることは世界標準です。歴史ある既存市街地、田園地域とニュータウンからなる三田には、多様な文化や活動、技術を持つ人がたくさんいます。その中で、似た活動を行う者同士がつながり、新しいNPO法人が多く誕生したのは、これまでのまちづくりの

便性や運用面での負担を減らし、外出をしたくなるようにするためにも、ICTの活用が有望です。

赤澤 欧米では、よく歩道でカフェが見られますが、道路は人が「移動する」だけでなく「滞留する」場所でもあるという発想です。例えば、フラワータウン駅前の車道を歩行者専用にし、人工芝などで滞留空間を設けると、車のための空間が人のための空間になり、「まち」が裏返ります。道路や公園の空間は、法改正されたことでいろんな可能性が広がりました。公園別に利用規制を緩和すると楽しみ方も変わります。近くに児童公園があるけど、ちょっと向こうの公園にも行きたいという場合に、子どもたちだけでも、好きな公園へ安全に行き来できるまちの仕組みとして、自動運転が力を発揮します。フラワータウンのようなまち単位で考えるといろんな可能性が、実現できる気がします。空間の活用が見直すことで、幅広い年齢層が楽しめるまちができるって夢見えています。

市長 より魅力あるまちとな

成果とも言えます。今後は、もう一歩進め、違う個性がつながることが必要です。例えば、自分たちだけではできないことをどのように実現するのか。それには、さまざまな団体が集い、話し合う場である「まちづくり協議会」が役立ちます。地域内にある個性や多様性につながり、成功体験を積み重ねることで、さらに広い地域がつながり、より大きな人の輪になっていくと思います。

中村 世界中で、デジタルの力で都市機能を高めるスマートシティの取り組みが進んでいます。それぞれの都市は住む人や文化、風土などが違うため、課題も異なります。大きな企業が一つのソリューション(解決策)を示しても、すべてのまちに適合するとは限りません。まちの課題解決には、市民一人一人が自分事として、みんなで助け合って、解決しようという文化、雰囲気醸成することが大切です。昨年11月に、市役所でスマートシティのワークショップを開催しました。参加者が身近で困っていることを出し合い、とても白熱した議論でした。まちのことを自分事として考

るため、この10年でどのようなまちにしていきたいのか。交通は、「住み続けたいまち」の重要な要素だと考えています。令和2年にウッドイタウンで自動運転バスの実証実験を行いました。外出は多くの人にとって楽しみだと思えます。移動手段だけでなく、まちの賑わいを創出する三田駅前の再開発(Cブロック)がもうすぐ動き出します。近郊の都市に出ていなくても、市内で楽しめる場所を三田駅前を中心に創りたい。住む場所の近くに、公園があることも三田



Teisuo Mori
森 哲男 市長



数多ある魅力を織りなし 新たな可能性を創り出す

Profile 平成27年8月に三田市長に就任、現在2期目。平成2年に三田に移り住み、家族や地域の方々と共に歩んできたこの地を「ふるさと」としてこよなく愛し、将来に伝えていきたいと願っている。

の魅力です。公園も含めた緑地や環境をまちの魅力として大事にしたいと思います。

「さと」が育む—— 都市との距離感が魅力

三田の「さと」の魅力を生かした10年後の姿についてお聞かせください。

赤澤 三田の「さと」には、希少生物を育む自然もあれば、高いレベルを誇る農業もあります。住みたいまちの世界的指標に、景観と健康が含まれますが、健康はおいしい野菜が食べられることでも得られます。都市的な暮らしの中に、野菜の直売所があるという素晴らしい環境を活かすべきです。「さと」と「まち」の距離感がとても近い。富士小学校の校区には、ニュータウンと田園地域の2つの集落があります。祭りがニュータウンに来たり、子どもが農村で芋ほり体験をするなど、相互交流が盛んです。願わくば、さらに地域支援型農業のように年間契約でニュータウンの人が農産物を、適正価格で買い支える仕組みができれば、田園地域

は安心して農業に専念でき、ニュータウンは自分のまちだけでは手に入らない恩恵を得られます。このようなお互いにメリットを与える関係が、地域交流の目指すべき姿だと思います。三田の農業を守るため、そして若手農家の育成を図るために、農業関係者による育成支援だけではなく、まち全体で三田の農業を守っていくことができます。

清水 農業の従事者から、農業に対するプライドや職業としての魅力を教えていただく機会がありました。三田の「さと」の魅力には、「まち」との距離感もあります。農業を営みながら、都市的な生活ができるというのは、新規就農を志す人にとって魅力的です。また、古い城跡や寺など点在する歴史ある文化建造物に目を向けると、「さと」の魅力はさらに際立つものになると思います。

中村 アプリ開発の一環で、学生と田園地域を巡りましたが、新鮮な驚きの連続でした。「さと」には観光資源としてのポテンシャルがあると感じました。知らなかったこ

とを知ることを得た驚きや感動をしっかりと発信できれば、もっと「さと」が賑わうと思います。それにはデジタルが活用できるはずですよ。

市長 農業の課題は2つあります。農業を本格的に行うための資金と、高齢化によるマンパワー不足の問題です。対策として、デジタルやドローンなどのスマート農業を活用したいと考えています。また、副業という農業の新しい働き方も広げていきたいと思っています。在宅ワークが定着することで、これまでの兼業農家とは違う働き方ができるのではないかと期待しています。

さらに、市街化調整区域の規制緩和も「さと」における大きな課題です。ニュータウン以外のミニ開発を規制するため、地域の約9割を市街化調整区域に指定していますが、規制緩和を求める声も多く、兵庫県に強く要望しています。

赤澤 他市の事例から見ても、利便性を求める視点だけで進めるのではなく、景観や環境配慮など、「さと」全体の最適環境を考え

「個性」や「多様性」が 認められるうちに

Profile 兵庫県立大学 自然・環境科学研究所教授。公園や広場などオープンスペースの計画からマネジメントの手法について、多様な主体の協働による新しい質の創出を含めた研究・実践に取り組み、ご活躍されています。

ながら、規制緩和していく方法はあると思います。

清水 規制緩和により開発された自然や景観は、簡単には元に戻りません。「さと」には「さと」として守っていく良さというものもあり、これに関しては慎重な見極めが必要だと思います。

市長 子ども世代に帰ってきてほしいが、今の規制があると難しいという田園地域の声も切実です。いろんな意見はありますが、環境と景観を守ることを前提とし、「さと」を支えていくために、どのような手法が三田市としてベストなのか、しっかりと検討していきます。

「ひと・まち・さと」—— 魅力を織りなし、未来都市を創造する

「織りなす」をキーワードに、どのようなまちの姿を思い描いているかお聞かせください。

中村 スマートシティというところごくハイテクなイメージがありますが、そこに住む人が

心地よくいきいきと暮らせないと意味がありません。ICTはそこに暮らす人に役立つ情報を運ぶ手段です。暮らしのニーズは都度変わります。10年先を見据えて、壮大な計画を作るのではなく、市民のニーズを小刻みに把握し、アジャイルに（迅速に、機敏に）対応することが大切です。初めから完成された図案を目指すというより、時間軸でさまざまな変化に柔軟に対応していくことがまさに「織りなす」だと思います。

赤澤 ゼロカーボンへの取り組みに例えると、自分の生き方だけでなく自分以外の周りの情報も知ること、知らない人も含めて、暮らしが環境にやさしくて、素晴らしいという価値観を互いに共有することが必要です。スマートシティが進むことで、さまざまな情報が集約され、見える化できるようにになります。多様性を活かすやすくなり、選択肢を高めるきっかけになります。ゼロカーボンだけでなく、小さな取り組みも見える化され価値を持つという観点から、スマートシティの取り組みは素晴らしいと思います。

清水 「織りなす」は、織物をイメージし、ずっと続いていく感じがします。「ひと・まち・さと」が糸になって交わり、どんな魅力的な織物ができるのか楽しみです。いろいろな人が三田の10年後を夢見て、思いを巡らせています。三田の魅力を織りなすために、人の思いがつながり、いろんな場面を共有できるまちになればいいと思います。

市長 まちづくりにおいて、柔軟に適時適切に課題に対応し、解決を図ることが大事です。ゼロカーボンシティを目指していますが、日常生活において苦痛を強いるのではなく、達成感なり生活の豊かさを感じることをできるよう取り組みを進めていきます。三田には、まだ知られていない潜在的な魅力がいっぱいあります。その魅力を効果的に「織りなす」ことで、できあがるまちの姿をしっかりと発信していくことも必要です。これまでの田園文化都市のまちづくりにより、創り上げてきた「ひと」「まち」「さと」を織りなすことで、輝く未来都市を目指していきます。

Yoko Shimizu
清水 陽子 さん



チャレンジする人を応援できる 人が育つまちづくりを

Profile 関西学院大学 建築学部教授。「住み続けられるまちづくり」を大きな軸として、土地利用や空き家対策、地域コミュニティの役割などをテーマに研究に取り組み、ご活躍されています。

ニーズに迅速な対応 ICT で情報を運ぶ

Profile 神戸大学大学院 システム情報学研究所准教授。スマートシステムやIoTなどをソフトウェア工学のエッセンスを活用し、設計・実装する研究に取り組み、ご活躍されています。令和3年3月にさんだ里山スマートシティアドバイザーに就任。

Masahide Nakamura
中村 匡秀 さん

